

呼吸法

呼吸法・・・その言葉を聞いて何を思い浮かべるでしょう？

「気」を身体に巡らすための禅の修行、ヨーガ、太極拳、健康な体づくりのための日課・・・、あるいは、マウスツーマウスなどの人工呼吸法、また人工心肺などの医療機器による治療法が思い浮かぶかもしれません。

私達が「呼吸」をテーマにとりあげたのは、まずそれが、腕や手の随意的な筋肉運動や心臓や胃腸の不随意的な運動とは異なる”半随意的”な身体の活動であるからです。私達は普段、意識しないままに横隔膜や腹や胸の筋肉を動かして呼吸をしています。意識してそれを止めようとしても、いつまでも止めていることはできません。呼吸というシステムは、精神によるコントロールの可能性と不可能性との曖昧な領域にあるようです。宗教や武道の修行に限らず、スポーツや芸事においても、呼吸法は非常に重要視されています。呼吸をあえて意識したり、制御しようとするのである種の精神状態を呼び込んだり、身体運動をコントロールすることが目ざされます。例えばある種の瞑想法などの場合、修行をつむと呼吸の間隔が次第に長くなり、しまいには、1分間に1回、3分間に一回といった具合に、ある程度意識的に呼吸時間を調節できるようです。呼吸を通して、身体に働き掛け、それを又精神にフィードバックさせるといったシステム、方法論がそこにはあるのでしょうか。そう考えてみると、呼吸というのは、私達の意識と身体をつなぐ、一つの通路、インターフェース（界面）のような気がしてくるのです。

人ばかりでなく、様々な生命体が呼吸しています。人の外部に存在する動植物ばかりでなく、人の体内の幾多の寄生虫も呼吸していますし、エネルギー交換として考えれば、体内の無数の細胞自体が呼吸している訳です。身体外、身体内を通して呼吸のざわめきに満ちた空間が広がっています。

また、死の判定に、心停止、瞳孔の拡大に先立って、自発呼吸の停止が用いられることをあげるまでもなく、呼吸は生命活動と直結してイメージされています。息を吹き返す（蘇生）、息を引き取る（死）といった言葉、息を吹き掛けられて活動し始める人形、あるいは息を吸われて魂を奪われる物語り・・・。白雪姫ももしかしたら、白馬の王子の人工呼吸によって蘇ったのかもしれません。

ここから、自発的で様々なリズムをもつ運動、海の満ち引きや、月の満ち欠けなども大きな呼吸運動の一つとしてとらえるイメージが生まれてきます。地球を一つの大きな生命体として見る考え方もその一つでしょう。

一分間に12回から17回の人呼吸、しかし、それらは永遠にいつまでも続くリズムではありません。人が一生の内にする呼吸の数は、約6億回です。（14回 x 60分 x 24時間 x 36

5日 x 80年 = 588,672,000回)。鉄が酸化されて錆となっていくように、一息ごとに身体は酸化(?)され、変化を被っていきます。呼吸という外界との循環システム、それは、生命の維持、安定化のシステムではなく、変化や変動のシステムなのかもしれません。

そこにおいて、呼吸法とは、理想の健康的身体、若々しい身体を目ざすものではなく、身体内外の変化や変異を肯定的に受け入れていく方法論として捉え直すことができるかもしれません。

さまざまなイメージや考えを促す呼吸というものから、この展覧会では、空気を媒介とする映像装置／機械と人の相互作用の場、息のざわめきの場を形作ることを試みます。テクノロジーをも含めた形での循環システムの夢想(夢創)的?あるいは錬金術的關係がインスタレーション(仮設環境)という形態を借りて描ければと思います。

今回の展覧会は、今年5月に京都のギャラリー16で行なった展覧会「呼吸法I」のパート2として展開されます。「呼吸法I」で試みた空気流の身体への吹き掛けが、今回は異なった形態と意味合いを帯びることになります。

(夢創館通信 Vol.24)